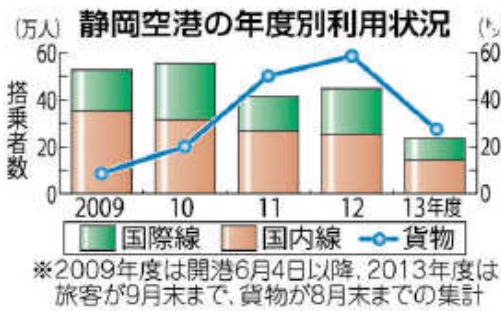


静岡空港 ソウル線低迷直撃

「搭乗70万人」目標遠く



静岡空港の2013年度の搭乗者数が、県総合計画の目標である「年間70万人」を達成できないことが現実になった。ソウル線など観光需要に依存する国際線の低迷が響いている。戦略の見直しを迫られる県は貨物

輸送やビジネス利用に活路を求め、大幅増の見通しは立たない。

―関連記事24面へ―

目標が達成不可能になったのは、本年度後半のダイヤ改正で今年10月から来年3月までの全路線の提供座席数は約38万席と決まり、仮に全席埋まっても70万人に届かないため。開港した09年度は52万人(同年6月～10年3月)、10年度は55万人と推移したものの、東日本大震災や東京電力福島第1原発事故の影響などで11年度は41万人、12年度は44万人と伸び悩んでいる。

国内線の搭乗者数を上回る勢いだっただけでなく、特に県空港利用政策課が「静岡

空港の利用をけん引する存在」と認めるソウル線は、アジアナ航空と大韓航空の2社が乗り入れ、開港以来最多の集客力を誇ってきた。だが、10年度の搭乗者数19万人に対し、本年度は9月末までで5万8千人にとどまる。

福島第1原発の汚染水漏れによる風評被害、竹島や歴史認識の問題による国際情勢の悪化で観光客の減少が続く。アジアナは10月27日から週5往復、大韓も週3往復に減便する。搭乗者数減が減便を招き、減便で利便性が薄れるとさらに搭乗者数が減る悪循環が起きつつある。旅行会社の幹部は「ソウル線は危機的な状

県、貨物やビジネスに活路

況」と明かす。

こうした状況を受け、県は韓国向けにテレビショッピング、商談会の開催を予定。ソウルなど国際線を利用し、ソウルなど国際線を利用した場合のキャンセルも増やすなど、ビジネス客への支援を拡大した。

目し、他空港から切り替えた場合の追加費用を県などが負担するトライアル輸送にも取り組む。貨物輸送は開港時から右肩上がり、約6倍に伸びている。広岡健一課長は「静岡空港は空港までの輸送時間が短いのが利点。コンパクトなので税関、検閲の時間も他空港より短縮できる」と強調する。



海外に向けて航空機に運び込まれる貨物。県は貨物輸送の促進に力を入れる―9月中旬、静岡空港